【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	山　口　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	小野田市立　高泊小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	１	１	１	２	１	１	０	７	１０
児童数	３３	２６	２３	４５	３９	３１	０	１９７	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生きる力を育む学習指導の探究

～「確かな学力」の定着をめざす学習指導の工夫・改善～

２．研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・　全学年・算数

本教科は基礎・基本の定着に差が生じやすく、個に応じた教材の研究・実践、少人数指導やティームティーチングの指導形態の導入が、よりきめ細かな個に応じた指導となり、「確かな学力」の定着につながると考えた。

・　１、５、６年・国語

「確かな学力」の定着のため、課題を処理・表現する段階での、国語「言語領域」における学力の定着が必要であり、少人数指導やティーム・ティーチングにより指導していくことがより効果的であると考えた。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度

○　テーマ

研究主題から低学年、中学年、高学年ごとに求める児童像を設定し、標準学力検査と意識調査の結果をもとに各ブロック別に研究課題を設定した。（下図参照）

○　研究の見通し

学力向上フロンティアスクールの趣旨

・　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発
・　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
・　児童生徒の学力の評価を生かした授業改善
・　児童生徒による授業評価を生かした授業改善

に沿った取組を学校の特色を生かしながら行うことにより、児童に「確かな学力」のの向上が見られるという仮説をたて研究を推進した。

○　研究の内容・方法

学力向上フロンティアスクールの趣旨に沿って、全校での取組項目、学ブロックでの取組項目を具体的に計画し、日々の学習指導で実践したり、研究授業で提案・検証していった。

学校教育目標
夢や希望をもち，豊かな人間性とたくましい実践力を身につけた児童の育成

めざす児童像
(1) 自ら課題をもち，進んで学び，学んだことを表現できる子
（燃える心・創る力・学ぶ力）**かしこく**
(2) 一人一人の違いを尊重し，自分の思いを表現できる子
（広い心・生き抜く力）**やさしく**
(3) 感謝する気持ちをもち，進んで働く子
（温かい心・生き抜く力）**たくましく**

研究主題
生きる力を育む学習指導の探究
～「確かな学力」の定着をめざす学習指導の工夫・改善～

求める児童像

低学年	中学年	高学年
楽しく学習に取り組み，学んだことを伝え合うことに喜びを感じることができる児童	友達と協力して学習に取り組み，自分や友達の成長に喜びを感じることができる児童	課題意識をもち学習に取り組み，学んだことを自分の生き方に生かすことのできる児童

高洞小学校児童の実態（実態調査による）

研究課題

低学年	中学年	高学年
基礎・基本の定着をめざした，具体物を用いた楽しい学習活動の工夫	友達と学び合いながら，自力解決に向かって意欲的に取り組む学習活動の工夫	自ら課題を設定し，自分を見つめながら主体的に課題を解決することができる児童を育てるための学習活動の工夫

具体的な取組み

全校体制での取組み

(1)　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発
○　基礎・基本の定着に向けた教材開発（寺子屋タイムの実践など）
○　課題別学習のための教材開発・実践
○　授業研究
②　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
○　効果的な少人数指導・TT指導方法の研究・実践
○　学習指導案形式の検討
○　授業研究
○　学習環境整備，教材管理などのハード面の整備・充実
③　児童の学力の評価を生かした指導の改善
○　実態調査の研究・実施・考察
○　評価基準・評価計画の作成（算数）
④　児童による授業評価を生かした授業改善
○　児童による授業評価方法の研究・実施・授業改善
⑤　学校・地域の特性を生かした体験活動重視の学習活動
○　「いのち・・・共生」をテーマとした総合的な学習の時間の実践
○　道徳，特別活動等での体験的な活動の実践

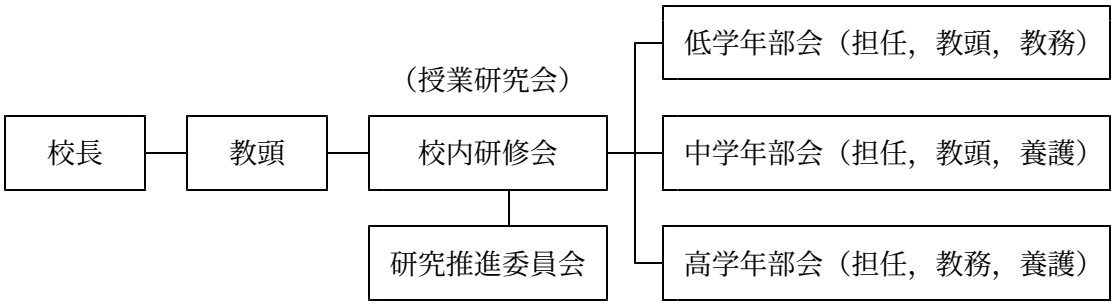
低　学　年	中　学　年	高　学　年
①　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 ○　楽しく，繰り返し学習できるプリントの作成 ②　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ○　習熟度に応じた指導方法の工夫 ③　児童の学力の評価を生かした指導の改善 ○　児童の思いや願いが生まれる指導計画の工夫 ④　児童による授業評価を生かした授業改善 ○　わかる喜びを感じられる授業改善 ⑤　学校・地域の特性を生かした体験活動重視の学習活動 ○　学んだことを生活に生かし，伝え合える学習場面の設定	①　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 ○　基礎・基本の定着をめざした寺子屋タイムの実践 ②　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ○　「ヒントカード」の作成と実践 ○　効果的な少人数指導の研究 ③　児童の学力の評価を生かした指導の改善 ○　次時への指導に生かす評価記録の作成 ④　児童による授業評価を生かした授業改善 ○　児童による自己評価カードを生かした授業の改善 ⑤　学校・地域の特性を生かした体験活動重視の学習活動 ○　「ふるさと」をテーマとした総合的な学習の時間の実践	①　発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発 ○　習熟度別指導に対応した教材の開発と研究 ②　個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善 ○　効果的な少人数指導をめざした「チャレンジタイム」の研究と実践 ③　児童の学力の評価を生かした指導の改善 ○　児童が自己診断をもとに学習を展開することができるような支援の工夫 ④　児童による授業評価を生かした授業改善 ○　振り返りカードを生かした授業改善 ⑤　学校・地域の特性を生かした体験活動重視の学習活動 ○　「健康」「平和」「環境」「福祉」をテーマとした総合的な学習の時間の実践 ○　５・６年の連携による学校行事，地域行事への取組み

- 1 -

平成16年度	○　テーマ 平成１５年度の実践から成果と課題を分析し、テーマを設定する。 ○　研究の見通し 〈１学期〉 ・　２年次の実践研究計画の立案 ・　実践研究内容の修正 ・　実践研究推進のための教育課程の工夫 ・　年間スケジュールの作成 ・　意識調査，実態調査の実施（１年次との比較分析）

・　実践研究の推進
〈２学期〉
・　実践研究の推進
・　理論研修，具体的な取組の実践
・　先進校視察，情報収集
・　研究発表会の開催（１０月）
〈３学期〉
・　実践研究の推進
・　具体的な取組の実践とまとめ
・　意識調査，実態調査の実施（年度初めと比較）
・　２年次の研究の成果分析
・　研究集録の作成
○　研究の内容・方法
・　平成１５年度の実践から、課題と仮説を設定し、より確かな学力を育てていくための実践をしていく。
・　２年間の研究のまとめとして、成果の普及が幅広くできるような実践を行う。

(3) 研究推進体制



III　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

(1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発

習熟度別やＴＴから二つのグループに分かれる少人数指導では、児童の実態に応じて発展的な学習内容を含んだ教材や補充的な学習の内容を含んだ教材を学習課題として、児童に提示することができた。特に「茶つみコース」「梅もぎコース」などの習熟度別指導の際に活用できた教材は多く、今後の学習指導に活用できる学習プリントなどを作成することができた。

また、本校の特色を生かしたネーミングの習熟度別指導はどの学年にも定着し、それぞれのコースでの学習の特徴を児童や保護者が把握できたため、今後の学習も児童や保護者の理解を得ながら進めることができると考えられる。

(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

放課後や休憩時間を利用した個別指導には限界があり、個に応じた補充学習の時間を確保することは難しい。本年度開催した夏季休業中の「梅っ茶スクール」は時間にも余裕があり、普段できなかった個別指導にじっくりと取り組むことができた。児童や保護者の感想も「楽しかった。」「是非、また開催してほしい。」という声が多く、今後の開催への大きな期待が感じられた。

(3) 児童の学力の評価を生かした授業改善

標準学力検査により前学年終了段階での基礎・基本の定着を把握し、児童一人一人に対

応できる学習計画を作成できるように配慮してきた。また、年度末にも標準学力検査を行い、本年度の成果を数値的に把握することとした。（２月６日現在、結果集計中）

授業中に行った「振り返りカード」の中の自己評価により、その時間の到達の様子を把握する努力をし、次時のコース選択の際の助言になるようなアドバイスを心がけた。

(4) 児童による授業評価を生かした授業改善

「振り返りカード」の中に「先生へ」などの教師に対するメッセージを書ける項目を用意し、その時間に感じた児童の思いを吸い上げるよう試みた。授業に対する児童の願いや、教師の提示する教材、発問への反応の声を聞くことができ、児童と教師の学習を媒介としたコミュニケーションにもなった。また、このようなアンケートを単元の途中で行うことにより、学習計画の見直しや、児童一人一人への個に応じた指導の改善を図るための貴重な資料となった。

２．今後の課題

(1) 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発

習熟度別指導については、児童のコース選択の際、児童一人一人が自分にあったコース選択になるような教師の支援が必要である。また、そのコースの中でも児童の実態に即した教材が作成され、児童一人一人への個に応じたきめ細かな指導ができるように教材開発を続けていきたい。

(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

本校の特色を生かした「茶つみコース」「梅もぎコース」などの習熟度別の学習指導の形態は児童の中に定着したと思う。しかし、同じグループの児童の中にも学力差が生じるため、さらに細分化した指導方法の研究が必要となる。また、一斉指導の中でも個に応じた指導ができるような教材開発や指導方法の研究を進めていかなければならない。

(3) 児童の学力の評価を生かした授業改善

標準学力検査により、把握した児童の学力を一人一人分析し、個に応じた指導計画の作成のあり方を研究する必要がある。また、単元途中の小テストなどの形成的な評価を客観的なデータとして蓄積し、児童の学習状況をより細かく分析していくことにより、授業改善を図っていく必要がある。このような、評価と指導、そして授業改善が一体化していけるような評価方法の研究や評価対象物の作成が今後の課題である。

(4) 児童による授業評価を生かした授業改善

児童による授業や教師へのメッセージは児童の「わかるようになりたい。」「楽しく学習したい。」という願いが込められている。このような願いを授業改善により実現していくため、本年度蓄積したデータを分析し、来年度以降の各単元の学習計画作成の際の資料としていきたい。また、授業改善に効果的に結びついていくような授業評価の方法も今後検討し、実践していきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

１．算数の標準学力検査

算数科での児童一人一人の学力を測定する方法として標準学力検査を４月と２月に年２回行い、取組の成果を数値で表すことができるようにした。

（２月６日現在、２回目の検査結果は処理中につき、考察は２月末の予定）

２．算数学習、少人数指導への児童の意識調査実施

算数学習と少人数指導に対する児童の意識調査を年に３回（５月、１０月、２月）に行い、児童の意識の変容を把握した。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

１．校内授業研究会と授業参観を一体化

本研究を保護者に理解してもらうため、各学年校内授業研究会の際に、各種通信等で保護者に連絡し、授業参観を呼びかけた。

回	期　　日	学　年	教　科	単　　元
1	６月　４日（水）	４年	算数	「面積」
2	７月　１日（火）	５年	算数	「四角形」
3	１０月１５日（水）	１年	算数	「たし算（２）」
4	１０月２８日（火）	６年	算数	「体積」
5	１１月２８日（火）	２年	算数	「かけ算（２）」
6	１２月　３日（水）	３年	算数	「表とグラフ」

２．小野田市学校教育研究会　小学校算数部会研修会で授業公開

(1) 期日　平成１５年１０月２８日（火）

(2) 場所　小野田市立高泊小学校

(3) 内容

本校の学力向上フロンティアスクールとしての取組の紹介を兼ねて、６年生の算数の授業を公開した。

３．厚狭管内学力向上フロンティア事業地区協議会会場・授業公開

(1) 期日　平成１６年２月３日（火）

(2) 場所　小野田市立高泊小学校

(3) 内容

会場校として、授業を公開した。

４．各種通信等で保護者へ普及

学校便り、学年便り、学級便り、また「フロンティアスクール　TOMARI かわらばん」を作成し、学力向上フロンティアスクールとしての取組や児童の学習の様子などを紹介した。

５．研究集録の作成・配付

本年度の学力向上フロンティアスクールとしての取組を研究集録にまとめ、管内の小学校・市内の中学校に配付する。

６．ホームページで公開

本年度の学力向上フロンティアスクールとしての取組を紹介できるコーナーをホームページ上に設け、広く公開する予定である。

７．教育後援会等の総会・役員会、学級懇談会での説明や取組の紹介による家庭や地域との連携

学校で開催される各種会議において、取組の説明を行った。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　☑７～１２学級　□１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　☑国語　□社会　☑算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無